### 九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

## 『思はぬ方にとまりする少将』ところどころ

後藤, 康文 宮崎大学助教授

https://doi.org/10.15017/9445

出版情報:語文研究. 75, pp.51-59, 1993-06-06. 九州大学国語国文学会

バージョン:

権利関係:

# 『思はぬ方にとまりする少将』ところどころ

# 後 藤 康

は じ め に

な点が少なからず残されているのである。そこで、本稿では、同物 であるし、なによりも、この短篇物語集の伝存状況自体が決して芳 ら、その本格的な注釈の歴史はきわめて浅く昭和期を遡らないもの ついて、本文の整定あるいは解釈に関する試案をそれぞれ提示して 注釈では不正確ないし不十分であると考えられるいくつかの箇所に 語所収の一篇『思はぬ方にとまりする少将』を俎上にのせ、従来の しいとはいいがたいことが災いして、各篇の注釈には、いまだ不審 さに異例といえるほど、多数の注釈書に恵まれている。しかしなが 『堤中納言物語』は、『源氏物語』よりのちの物語作品としてはま

思われるのである。 らっしゃったと記されていて、その間に齟齬が生じてしまうように らないけれども、この場合ははじめに「大納言」の姫君がふたりい 納言」が亡くなったという叙述そのものは別段奇異とするには当た こで問題となるのは、傍線を付した「こ」一字の存在である。「こ大 まずは、ヒロインとなる姉妹の紹介が行われるわけであるが、こ だつ人もなし。 細きふるさとにながめ過ごし給ひしかど、はかばかしく御乳母 るありさまに劣るまじく、何ごとにつけても、生ひ出で給ひし に、こ大納言も母上も、うちつづき隠れ給ひにしかば、いと心 大納言の姫君ふたりものし給ひし、まことに物語に書きつけた (一一七頁六行~一一八頁五行)

の左右が分かれた結果、左半分が「に(尓)」右半分が「こ(己)」 点の「こ」の字の由来に関して、直前の「給ひしに」の「に(仁)」 である。ちなみに、山岸徳平氏の『全註解』は前者の立場から、焦 消してしまうか、逆に、最初の「大納言」の頭に「こ」を補うか、 すなわち、「こ大納言」の「こ」を無用な文字と判断して本文から抹 これについては、ひとまずふたとおりの解決案が考えられよう。

語り手の前口上のあと、物語は次のように語りはじめられる。

ろ「に(二)」の衍字を考える方がまだしも穏やかな推定ではなかっ強引な想定であり、かりにその線で説明を試みるのであれば、むしが当てられるようになったものと推測しているが、これはあまりにとしてそれぞれ独立し、さらに、その「こ」に「古」あるいは「故」

たかと感じられる。

「昔こ大納言殿の領じ給ひし所」(⑤―三八頁)とも記された例が見て古、以上のような処理の方法も一応考慮の余地があるとは思うさて、以上のような処理の方法も一応考慮の余地があるとは思うさて、以上のような処理の方法も一応考慮の余地があるとは思うさて、以上のような処理の方法も一応考慮の余地があるとは思うさて、以上のような処理の方法も一応考慮の余地があるとは思うさて、以上のような処理の方法も一応考慮の余地があるとは思うさて、以上のような処理の方法も一応考慮の余地があるとは思うさて、以上のような処理の方法も一応考慮の余地があるとは思うさて、以上のような処理の方法も一応考慮の余地があるとは思うさて、以上のような処理の方法も一応考慮の余地があるとは思うさて、以上のような処理の方法も一応考慮の余地があるとは思うさて、以上のような処理の方法も一応考慮の余地があるとは思うさて、以上のような処理の方法も一応考慮の余地があるとは思うさて、以上のような処理の方法も一応考慮の余地があるとは思うさて、以上のような処理の方法も一応考慮の余地があるとは思うさて、以上のような処理の方法も一応考慮の余地があるとは思うさて、以上のような処理の方法も一応考慮の余地があるとは思うさない。

\_

なった。しかし、彼女には今や結婚など思いも寄らぬこととて、あったが、やがて右大将の少将が大君に熱心に求婚してくるように両親を亡くして零落し、もの淋しく心細い日々を送る姫君たちで

なく、ふたところ御殿ごもりたるところへ、導き聞えてけり。少納言の君とて、いといたう色めきたる若き人、何のたよりも

いっこう取りあわないでいたところ、ある日、しびれを切らせた少

内」も「前ぶれ」も、あろうはずがないではないか。 内」も「前ぶれ」も、あろうはずがないではないか。 内」も「前ぶれ」も、あろうはずがないではないか。 内」も「前ぶれ」も、あろうはずがないではないか。 内」も「前ぶれ」も、あろうはずがないではないか。 内」も「前ぶれ」も、あろうはずがないではないか。 内」も「前ぶれ」も、あろうはずがないではないか。 内」も「前ぶれ」も、あろろうはずがないではないか。 内」も「前ぶれ」も、あろうはずがないではないか。

三二四頁)、「何のたどりもなく、近づき寄らせ給へる」(『我身にたい一三一三頁)、「何のたどりもなく、なびく気色なれば」(同・⑴一三一三頁)、「何のたどりもなく」と整定されるべきで、少納言の君というたいそうちゃらもなく」と整定されるべきで、少納言の君というたいそうちゃられた。と整定されるべきで、少納言の君というたいそうちゃられば、というたいとり」は、「たどり」で、思慮、り」の誤写と見なければならない。「たとり」は「たどり」で、思慮、り」の誤写と見なければならない。「たとり」は「行んどり」で、思慮、り」の誤写と見なければならない。「たとり」は、明らかに「たと(止)

ること(『注釈的研究』)も付言しておくべきであろう。おいては、問題の箇所が「たより」ではなく「たとり」となっていなお、土岐武治氏の分類する第三門諸本(李花亭文庫本等)本文にどる姫君』巻四・⑶─四○頁)などの用例を指摘することができる。

### Ξ

やはり大きな疑問が残るのであり、むしろ「タマフニモ」とありた なく意味は通じそうに見えるけれども、副助詞「しも」の用法には 可能な話ではないのだろうか。これに対してAであれば、一見問題 の「タマヒニシモ」に明快な文法的説明を加えること自体、所詮不 えていたことがわかる」(『新大系』)といった解説も見られるが、こ るが、残念ながら、そのいずれにもしたがうことはできない。まず 照』 『全訳注』 『完訳』 『新大系』) のふたつに分かれているわけであ は、Bの考え方であるが、これはまったくの論外で、たとえば「「し」 的研究』『集成』)、B=「タマヒニシモ」と解する立場(『全集』『対 場(『評釈』『新註』『全書』『詳解』『大系』『全註解』『全釈』『注釈 この箇所に関する諸注の見解は、A=「タマフニシモ」と解する立 のであったが、右傍線部「給にしも」はいかにも不審な本文である。 「も」の助詞によって、姉君の愛らしさが、少将の想像を遥かに超 念願を叶えた右大将の少将は、故大納言の大君のことが、 つつ通ひ給ふ おしはかり給にしも過ぎて、あはれにおぼさるれば、うち忍び (一二〇頁四行~六行)

私見によれば、ここは「に」と「し」の間で転写の過程におけるいところである。

ある。 とも、 ぎて、尊くこそおはしけれ」(『徒然草』五十二段・七一頁)などが らず」(『恋路ゆかしき大将』巻一・⑶—二四三頁)、「聞きしにも過 すきまなくもてなし聞え給ふ」(『荅の衣』・⑶—一三三頁)、「何ご 御の御ありさまを、聞き給ひしにもやや立ちまさりて、まだしきに、 なりつる御琴の音かな」(『夜の寝覚』巻一・四八頁)、「春宮は、女 物語』真木柱巻・⑶―三七九頁)、「教へ奉りしにも過ぎて、あはれ かならない。したがって、このあたりの本文は「おしはかり給ひし なく、いわゆる過去の助動詞「き」の連体形であるということにほ しも」は「給しにも」の転化だということであり、「し」は助詞では よりさる御心なからんにてだにも、御覧じ過ぐすまじきを」(『源氏 にも過ぎて」と整定されなければならないのである。今、参考例の 転倒が起こったと判断するのが妥当かと思われる。すなわち、「給に 一端を掲げておくと、「聞しめししにもこよなき近まさりを、 はじめ これだけの裏づけがあればもはや十分ではなかろうか。 かねて思ひしにいみじうまさり給へれば、御心ざしなのめな

### 四

次のように述べられる。をついて、首尾よく中君のもとへ侵入するのであるが、その様子は、をついて、首尾よく中君のもとへ侵入するのであるが、その様子は、もうひとりの少将=右大臣の少将は、大君が太秦に参籠する間隙

本文整定上の問題点は二箇所あるが、はじめに前半部について考へ文整定上の問題点は二箇所あるが、はじめに前半部について考しのつつましき御さまなれば、ゆゑもなく入り給ひにけり。

えてみたい。この部分に対する諸注の見解は、A=本文を「何のつ

と、およそ三つに分かれているけれども、いずれも疑わしい。近年れば」と同意と考えるもの(『全釈』『全集』『対照』『完訳』『新大系』のれば」と区切るもの(『全註解』『集成』)、C―本文は「何のつつなれば」と区切るもの(『全註解』『集成』)、C―本文は「何のつつなれば」と回意とされば」とするもの(『評釈』『新註』『全書』『詳つましき御さまなければ」とするもの(『評釈』『新註』『全書』『詳

と「~デナイ」型とがあるが、「さまガナイ」というのでは、この文に何の」が呼応する打ち消しの表現には、大別して「~ガナイ」型した省略を行ったのではなかろうか」と説明するのだが、はたしてした省略を行ったのではなかろうか」と説明するのだが、はたしてした省略を行ったのではなかろうか」と説明するのだが、はたしていかがなものか。また、一部伝本に拠るA説も、文章として不自然。の理解はC説に傾いているようにも思えるが、「ことなき」の省略とと、およそ三つに分かれているけれども、いずれも疑わしい。近年と、およそ三つに分かれているけれども、いずれも疑わしい。近年

まり、傍線部「なれば」は「ならねば」の写し誤りだということだ。型の打ち消し表現に呼応するものと判断されるべきなのである。つそこで思うに、この場合の「何の」は、上に述べた「~デナイ」もはやコメントの必要すらないであろう。

男が見ず知らずの女の許へ不意に忍び込むのに、正当な理由も何も

く」といった解釈がこの場合正解かというと、もちろん否である。

土台あろうはずがないのだから。

脈に明らかにそぐわない。残るはB説であるが、これに到っては、

ねば」(『蜻蛉日記』上巻・六○頁)、「なほかしこに渡し奉りてむ。ないので」と解釈されるべきなのである。参考「何の石木の身ならしたがって、この前半部本文は「何のつつましき御さまならねば」したがって、この前半部本文は「何のつつましき御さまならねば」とを定されるのが適当といえ、「格別憚られる(お邸の)御様子ではしたがって、この前半部本文は「何のつつましき御さまならねば」したがって、この前半部本文は「何のつつましき御さまならねば」「ね(袮)」との誤写は十分に考えられるし、転写過「ね(袮)」との誤写は十分に考えられるし、転写過「ね(袮)」との誤写は十分に考えられるし、転写過「ねば)」

何のところせきほどにもあらず」(『源氏物語』若紫巻・⑴―三二二

もあらぬを」(『八重葎』・⑸─三九六頁)など。
みならねど」(『岩清水物語』上巻・⑵─五○頁)、「何ばかりの身にならねど」(『有明の別れ』巻一・⑴─三五四頁)、「何ばかりのいさならねど」(『有明の別れ』巻一・⑴─三五四頁)、「何の思ひ出での際にてもあらで」(『夜の寝覚』巻三・二三八頁)、「何の思ひ出での際にてもあらぬを」(『八重葎』・⑸─三九六頁)など。

次いで、後半部に移るが、ここで問題となるのは「ゆゑもなく」

く」とは根本的に「わけ」が違うのである。では、「何のいわれもならは、「わけ・理由」なのであるから、かりにこの形の本文に正の語義は「わけ・理由」なのであるから、かりにこの形の本文に正の語義は「わけ・理由」なのであるから、かりにこの形の本文に正の話義は「わけ・理由」なのであるから、かりにこの形の本文に正の訳表も「おき」という語にあるようだが、とても首肯しがたい。そもそも「ゆゑ」という語にあるようだが、とても首肯しがたい。そもそも「ゆゑ」という語いるはずである。諸注を参観すると、それぞれの底本に忠誠を尽という表現である。諸注を参観すると、それぞれの底本に忠誠を尽という表現である。諸注を参観すると、それぞれの底本に忠誠を尽

ろなのである。意味はいうまでもなく「不意に・突然・だしぬけおり、本文は文句なく「ゆくりなく」と定められねばならないとこきであろう―のであって、『評釈』『新註』等早期の注釈書にあるとし、誤写については「くり(久利)」→「へも(部毛)」を想定すべ方がよいかも知れない」(『全釈』)との推定が正鵠を得ている―ただ方がよいかも知れない」(『全釈』)との推定が正鵠を得ている―ただ方なら、「くり」、「くり」、「くりなく」とする。字形ろなのである。意味はいうまでもなく「不意に・突然・だしぬけるのである。意味はいうまでもなく「不意に・突然・だしぬけるのである。意味はいうまでもなく「不意に・突然・だしぬけるのである。意味はいうまでは、「ないのである。意味はいうまでは、「ないのである。意味はいうまでは、「ないのである。意味はいうまでもなく「不意に・突然・だしぬけるない。」というない。

五

たあと、問題の摩訶不思議な系譜紹介が行われる。と、右大臣の少将と中君との逢瀬ままならぬその後の状況が語られいと待ち遠に見え給ふ。(一二九頁三行~七行)いと待ち遠に見え給ふ。はむところを、父殿、いと急に諌め給へば、いまひと方よりは、たあと、問題の摩訶不思議な系譜紹介が行われる。

へば、少将たちも、いと親しくおはする。 この右大臣殿の少将は、右大臣の北の方の御せうとにものし給

(一二九頁七行~一三〇頁二行) をえないのである。 (一二九頁七行~一三〇頁二行) をえないのである。 (一二九頁七行~一三〇頁二行) をえないのである。 (一二九頁七行~一三〇頁二行) (一二九頁七行~一三〇頁二行)

物同士の近親関係が、上においてすでに述べられていることを当然は、「少将たち」が大変に昵懇の仲であることの原因たるべき別の人に、「少将たちも」という表現なのであって、この文脈における係助詞「少将たちも」という表現なのであって、この文脈における係助詞その謎解き―本文復原に際して重要な鍵を握っているのは、実は

うであるならば、「右大臣の少将」とあるべきで、「殿」は不要な表 臣の北の方」については、当然「右大将の北の方」の誤りであると されたことに、おそらくは起因していよう。そして、つづく「右大 示対象が「父殿」ではなくその子の「少将」であると短絡的に誤認 たと想定される。なお、「の少将」の補入は、「この」という語の指 現のはずなのだから。ゆえに、ここはもと「この右大臣殿は」であっ る部分にいきなりその息子が登場することはありえないし、万一そ なものではないということである。なぜなら、親同士の関係を述べ 傍線部「の少将」は後人のさかしらな補入であって、断じて本来的 同士が親しい間柄である〕ことの具体的説明でなければなるまい。 られるはずであるから、A部分の記述内容は、ふたりの少将の〔親 るならば、A部分とB部分との連係の論理は、A=「親同士が親し こととするが、まず第一に指摘できる点は、「右大臣殿の少将は」の い間柄である〕:B=〔その子供同士も親しい間柄である〕と考え へば」と、B「少将たちも、 A「この右大臣殿の少将は、右大臣の北の方の御せうとにものし給 のごとく前提としているのである。そして今かりに、問題の本文を、 上記の見地から、ここでは思い切った本文整定案を提出しておく いと親しくおはする」とに区切ってみ

たちも、たいそう親しいおつきあいをしておられた」という事柄だ兄弟でいらしたので、(従兄弟同士ノ間柄トナル両家ノ御子息) 少将忍ビ歩キヲオ諌メナサッタ)この右大臣殿は、右大将の北の方の御せうとにものし給へば、少将たちも、いと親しく大将の北の方の御せうとにものし給へば、少将たちも、いと親しく以上をあらためてまとめてみると、本文は「この右大臣殿は、右以上をあらためてまとめてみると、本文は「この右大臣殿は、右

判断しなければならない。

こと明白だといわざるをえないだろう。語の展開を面白くさせる大切な系図上の作為」(『新大系』)でもないの混乱は、「作者の錯誤」(『全集』)に因るものでも、また、「この物と理解することができるのである。こうしてみると、この系譜紹介

### 六

かき口説くのであった。その様子は、権少将は、この偶然の出来事をうれしく思い、「いと馴れ顔に」女を権少将は、この偶然の出来事をうれしく思い、「いと馴れ顔に」女を

と語られるが、ここで念のために確認しておきたいのは、傍線を付もあるべし。(一三九頁二行~四行)もあるべし。

いからである。

の意があるので、ここは「十分に予期できる」くらいに解釈してお定されると見てよい。そして、「思ふ」には「予想する・予期する」場合には、上接する動詞「思ふ」の担う意味によってその語義は決「十分に~できる」ほどの意に考えると当たるから、「思ひあふ」の私見を示せば、まず、下二段活用の補助動詞「あふ(敢ふ)」は

すぎるうらみがあろう。 すぎるうらみがあろう。 すぎるうらみがあろう。 は、「予想しない人違いにも、当初からの意図であったと説明するいは、「予想しない人違いにも、当初からの意図であったと説明するいは、「予想しない人違いにも、当初からの意図であったと説明さというのである。従来の見解の中では、「計画する」という訳語、あことを、前々から十分に予期できていたかのごとくに振る舞った、ことを、前々から十分に予期できていたかのごとくに振る舞った、名のが適当ではないかと思われる。つまり、権少将は、大君ともいくのが適当ではないかと思われる。つまり、権少将は、大君ともいくのが適当ではないかと思われる。

るやうなり」(③―一六五頁)という一節も参考までに挙げておこの「鳥には桜の細長、蝶には山吹襲賜はる。かねてしも取りあへたとず」等の否定形で用いられることが圧倒的に多いのであるが、たとす」等の否定形で用いられることが圧倒的に多いのであるが、たとず」等の否定形で用いられることが圧倒的に多いのであるが、たとず」等の否定形で用いられることが圧倒的に多いのであるが、たとず」等の否定形で用いられることが圧倒的に多いのであるが、たとず」等の否定形で用いられることが圧倒的に多いのであるが、たとず」等の否定形で用いられることが圧倒的に多いのであるが、たとず」等の否定形で用いられることが圧倒的に多いのであるが、たとず」等の否定形で用いられることが圧倒的に多いのであるが、たとず」等の否定形で用いられることが圧倒的に多いのであるが、たとず」等の否定形で用いられることが正倒的に多いのであるが、たとず」の否定は、実際には「思ひあへところで、この「思ひあふ」という一節も参考までに挙げておこの「鳥には桜の細長、蝶には山吹襲賜はる。かねてしも取りなくさいであるが、たとず」等の否定形で用いることがである。

### 七

٠ ر

を届ける場面は、次のように描かれている。の許へ後朝の歌を贈るのであったが、そのうち権少将が大君に手紙のれる後朝の歌を贈るのであったが、そのうち権少将が大君に手紙

れて見せ奉れば いまひと方にも、「少将殿より」とてあれば、侍従の君、胸つぶ

とあるを、いづ方にも、おろかにおほせられんとにや。 浅からぬ契りなればぞ涙川同じなかれに袖濡らすらん

この助詞はいかにも落ち着きが悪い。ゆえに、これを説明して「と はじめに取りあげたいのは、「とあるを」の傍線部「を」であるが、 (一四六頁三行~一四七頁一行)

とにやあらむ」(『源氏物語』宿木巻・⑸―三九四頁)などと同型の そ見め、とおぼさるるは、人には言はせじ、われひとり恨み聞えん、 たとえば、「今は、いかにもいかにもかけて言はざらなむ、ただにこ ウツモリナノダロウカ」の文脈を形成する関係にあると判断され、 あるよの意。此の物語は、これで終ったのである」(『全註解』)とす は文末の「とにや(あらむ)」と呼応して、「~トアルノモ、~トイ る極端な見解まであったのだが、ここは、「も(毛・茂)」→「を (遠・越)」の誤写を想定するのが妥当であろう。そして、その「も」

構文と考えられるのである。

次に、「おほせられん」であるが、ここも釈然としない。本文をそ

改め、「よい加減な(通り一遍の有りふれた)言葉におっしゃること らう」ことは、まず考えがたいのである。本文を「仰せられず」と のだ。そうした状況の中で、恋する相手に「いいかげんにおつしや は、どちらの姫君に対しても並々ならぬ愛情を抱いて煩悶している れに照らして見る時、やはり不審とせざるをえない。ふたりの少将 う」(『新註』)の意にしか解せないはずであるから、物語の前後の流 れによると、「おろかに仰せられん」は「いいかげんにおつしやら のままに「仰せられん」とするのが通説のようであるけれども、こ

> れじ」に改め、「おろかならず思うとおっしゃるつもり」と訳す立場 が出来ない」と解釈する説(『全註解』)、あるいは、本文を「仰せら (『全訳注』)が生れるゆえんである。

かでか」等反語表現を形成する言葉が存在した、③「おほせられん」 である、②「いづ方にも」と「おろかに」との間に、もともとは「い 案としては、①「いづ方にも」の「も(毛)」は「か(可)」の誤写 ないし反語でなければならないということである。具体的本文復原 おろかにおほせられん」という表現全体は意味上、やはり打ち消し 問題点はふたつあるように思われる。その第一は、

の「ん」は「じ」の誤りである、などの可能性を一応想定してみる

意を述べる場面に、「女房などにも四五人よりほかは見え侍らねば、 で、失踪した女大将を男尚侍が本来の男姿に戻って捜索しにゆく決 思われるが、その一例を紹介するならば、『とりかへばや物語』巻三 に誤られることは、一般的可能性からするとやや考えにくいかとも ことができようか。②案にも心惹かれるが、今は、『全訳注』に同じ く③の考え方を採っておくことにしたい。「し(之)」が「ん(无)

うこと。つまり、「仰せられ」ではなく「おぼされ」が正しいと推測 な誤写というよりも、むしろ誤った文脈理解に原因があろうか。 上妥当な本文といえるのである。この異同は、字体相似による単純(ダ) 陵部本・国立国会図書館本等では「し」となっていて、後者が文脈 この傍線部分が、陽明文庫本・伊達家旧蔵本等では「ん」、宮内庁書 第二は、「おほせられ」は「おほされ」からの転化ではないかとい

て、「今宵もおろかに言はましかば、逃げなましを」(『うつほ物語

されるのである。なぜかといえば、「おろかに」を受ける言葉とし ありなしのけじめ知り侍らじかし」(二三一頁)という箇所がある。

(『夜のに良り」一字に読まれる可能性も十分にあると思う。 (良り)」一字に読まれる可能性も十分にあると思う。 (良り)」一字に読まれる可能性も十分にあると思う。 (良り)」一字に読まれる可能性も十分にあると思う。

ろう、というつもりなのであろうか」とでもなろうか。 おるも、いづ方にも、おろかにおぼされじとにや」と整定されるいだ素が複合して厄介だが、これにしばらく試解を付しておくなら、「ととになる。そして、「浅からぬ」歌の解釈、「にも」のニュアンス、とになる。そして、「浅からぬ」歌の解釈、「にも」のニュアンス、とになる。そして、「浅からぬ」歌の解釈、「にも」のニュアンス、とになる。そして、「浅からぬ」歌の解釈、「にも」のニュアンス、というつもりなのであろうか」とでもなろうか。

# おわりに

くないが、それらは懸案にして、いまはひとまず筆を擱きたい。古強い疑問を感じつつも、取りあげることをさし控えた箇所も少な

しさがあらためて確認されるケースもあろうが一、そうして残され 得できる見解が認められた場合にはこれを採り―むろん、旧説の正 た解釈上の問題点を可能な限り解消してゆくほかに道はないのでは な試案の提出が望まれ、さらに、それらを比較検討した上で十分納 な箇所のいちいちについて、まずは、それぞれの発想に基づく果敢 納言物語』の注釈を進展させてゆくためには、難解もしくは不可解 の見せた姿勢はむしろ評価されるべきであると思うし、今後『堤中 があるように感じられる。その意味では、結果はともかく『全註解 対して積極的な踏み込みに欠けるものが少なくなかったことに一因 まだに釈然としない部分を多く抱えたままであるのも、本文批判に のである。この物語が、その注釈書の数の多さにもかかわらず、い 臨んでみたところで、そこにおのずから限界があるのもまた当然な しか残されておらず、かつ、参照に値する異本が存在しないに等し だりに、あるいは、安直な思いつきによって、都合よく本文の改変 典の本文を注釈する際には極力その原文を尊重すべきであって、 い作品に関しては、逆に、この大原則を金科玉条として注釈作業に たとえばこの『堤中納言物語』などのように、素性のよくない本文 を行うことは厳に慎しまねばならない。それはもちろんであるが

### 注

なかろうか。

『評釈』、佐伯梅友『新註国文学叢書・堤中納言物語』(昭二四、講談りである。清水泰『増訂堤中納言物語評釈』(昭九、立命館出版部)→り回参照した『堤中納言物語』の注釈書および稿中での略称は次のとお

社)→『新註』、松村誠一『日本古典全書·堤中納言物語』(昭二六、朝

波書店)→『大系』、山岸徳平『堤中納言物語全註解』(昭三七、 **⇒『詳解』、寺本直彦『日本古典文学大系・堤中納言物語』(昭三二、岩** 日新聞社)⇒『全書』、清水泰『堤中納言物語詳解』(昭二九、要書房)

⇒『全註解』、松尾聡『堤中納言物語全釈』(昭四六、笠間書院)→『仝

物語全訳注』(昭五六、講談社)→『全訳注』、塚原鉄雄『新潮日本古典 釈』、稲賀敬二『日本古典文学全集·堤中納言物語』(昭四七、小学館 本の古典・堤中納言物語』(昭六二、小学館)⇒『完訳』、大槻修『新日 集成・堤中納言物語』(昭五八、新潮社)⇒『集成』、稲賀敬二『完訳日 ⇒『注釈的研究』、池田利夫『旺文社文庫・現代語訳対照堤中納言物語 ⇒『全集』、土岐武治『堤中納言物語の注釈的研究』(昭五一、風間書房 (昭五四、旺文社)⇒『対照』、三角洋一『講談社学術文庫・堤中納言

本古典文学大系・堤中納言物語』(平四、岩波書店)→『新大系』

2 『堤中納言物語』の本文は、高松宮家蔵本(池田利夫解題、複刻日本古 を正した箇所がある。なお、頁・行数の表示は、とりあえず新典社本の れる形態で引用したほか、 論眼となる傍線部分についても仮名づかい **邇**宮旧蔵本 (久會神昇解題、 汲古書院)、 吉田幸一氏蔵平瀬家旧蔵本 典文学館)、広島大学蔵浅野家旧蔵本(塚原鉄雄解説、武蔵野書院)、宮 新典社)の諸本に適宜依拠し、問題箇所以外は私意により適当と思わ 内庁書陵部蔵桂宮旧蔵本(池田利夫解説、笠間書院)、穂久邇文庫蔵久 (吉田幸一解題、古典文庫)、三手文庫蔵本 (塚原鉄雄・神尾暢子校注、

(4) 本稿での各種文献の引用は以下の書物に拠っており、また、巻数・頁数 手文庫本とも、「こ」の字母は「古」。 高松宮本・広島大学本・宮内庁書陵部本・穂久邇文庫本・平瀬本・三

3

かへばや物語』(新日本古典文学大系)、『有明の別れ』『岩清水物語 ついては私に適宜改めた)。『うつほ物語』(古典文庫)、『源氏物語』(日 等の表示もこれにしたがった(ただし、漢字・仮名づかい等の表記に 本古典文学全集)、『夜の寝覚』(日本古典文学大系)、『蜻蛉日記』『とり

> 角洋一編『鎌倉時代物語集成』)、『我身にたどる姫君』(今井源衛・春秋 集』『正治初度百首』『宝治百首』(新編国歌大観)。 会『我身にたどる姫君』)、『徒然草』(新潮日本古典集成)、『寂蓮法師 『苔の衣』『兵部卿物語』『八重葎』『恋路ゆかしき大将』(市古貞次・三

(5) 原本の表記は、高松宮本・広島大学本・宮内庁書陵部本・穂久邇文庫 本・平瀬本・三手文庫本とも「給にしも」。

6 原本の表記は、高松宮本・広島大学本・穂久邇文庫本・平瀬本・三手 文庫本「な礼は」、宮内庁書陵部本「な連は」。

7 原本の表記は、高松宮本・広島大学本・宮内庁書陵部本・穂久邇文庫 本・平瀬本「故もなく」、三手文庫本「ゆへもなく」。

8 原本の字母は、高松宮本・広島大学本・宮内庁書陵部本・穂久邇文庫

9 新大系本同頁脚注二九、鈴木弘道『とりかへばや物語 本文と校異』 本「越」、平瀬本・三手文庫本「遠」。 (昭五三、大学堂書店)三三八頁、田中新一・田中喜美春・森下純昭

10 この部分の原本の表記は、 穂久邇文庫本・平瀬本・三手文庫本とも「おほ世良礼ん」。 『新釈とりかへばや』(昭六三、風間書房)三三一頁校異欄参照 高松宮本・広島大学本・宮内庁書陵部本